

## アナログレコード用ラッカー盤カッティング その3

東洋化成

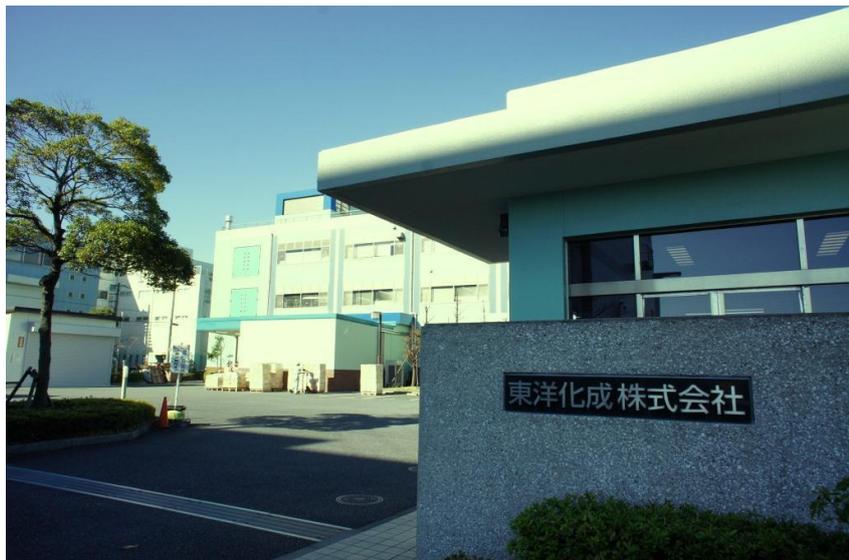
見たい聞きたい行きたいレポート 照井 和彦 JAS 事務局長

これまでにソニー・ミュージックスタジオ、ミキサーズラボ、日本コロムビア、そして JVC ケンウッド・クリエイティブメディアの状況について取り上げてきました。今回は、東洋化成のマシンとエンジニアへのインタビューをお伝え致します。

### 東洋化成

ユニバーサル ミュージックが 2012 年に企画発売した 100% Pure LP シリーズの発売開始に合わせた東洋化成の工場見学に訪れて以来、何度かカッティングルームに伺っておりますが、取材での訪問は今回が初めてです。JR 鶴見駅で電車を乗り換えて不思議な建築構造を持つ国道駅の次、鶴見小野駅で下車し歩いて向かいました。

1959 年に創業した東洋化成は SP レコードの材料工場として日本コロムビアなど各社へ納入を開始します。そして早くも 1961 年には日本でも需要が拡大し世代交代しつつあった LP レコードの素材工場として塩化ビニールの供給と、併せてプレス機を導入し LP レコードの製造が始まりました。ビクター、カナリア



レコードの工場も隣り合わせで並ぶ立地の中、東洋化成は印刷も手掛けます。そして 1966 年にはメッキ工場も操業を始め、さらに原盤のカッティングも受け入れられるようになり、現在の同社の事業全般が揃うこととなります。70 年代に入ってから LP レコードの需要増や、反対に CD の登場による急激なマーケット構造の変化など、その都度会社規模をたくみに調整しながら東洋化成は今日に至りました。

昭和の終わりとともに大手レコード会社がアナログ盤の製造を打ち切る中、日本唯一のレコード製造工場として音楽業界に貢献してきたことは、みなさんも良くご存じのことと思います。このところのアナログ盤ブームで、プレス生産枚数は大きく伸びているとお聞きしました。これは欧州のバンドが CD やデジタルファイル配信に替えてアナログ盤でリリースを始めたのがキッカケとも、90 年代のアナログ DJ 再燃現象とも言われているようです。

カッティングレース VMS70



(写真上) カッティングレース VMS70 ターンテーブル駆動は DENON 製モーター



(写真左) ターンテーブル天面 (写真右) ターンテーブル下部にモーター部が見える

ターンテーブルは日本コロムビアのVMS70同様DENON製のダイレクトドライブ方式のモーターに変更されていました。



(写真左) カッティングヘッド SX74 (写真右) カッティングピッチ監視用のメーター



(写真左) テレフンケン製テープレコーダー (写真右) ノイマン製コンソール本体



テープレコーダーには勿論先行ヘッドを備えており、コンソール本体と同色塗装なのが面白いところです。

(写真左)  
Electronic Package  
SAL74

(写真右) デジタルマ  
スター再生用に稼働す  
るオーディオワークス  
テーション

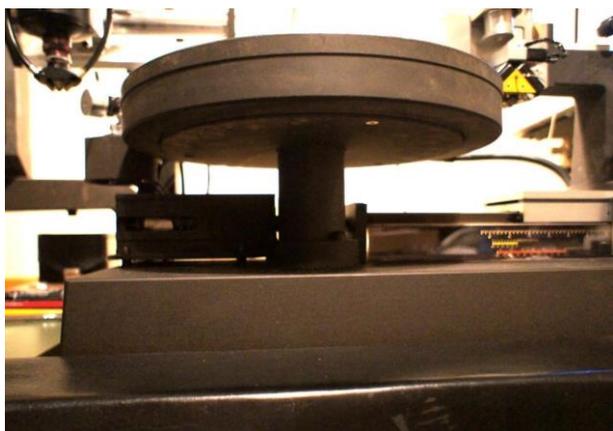
カッティングレース VMS80



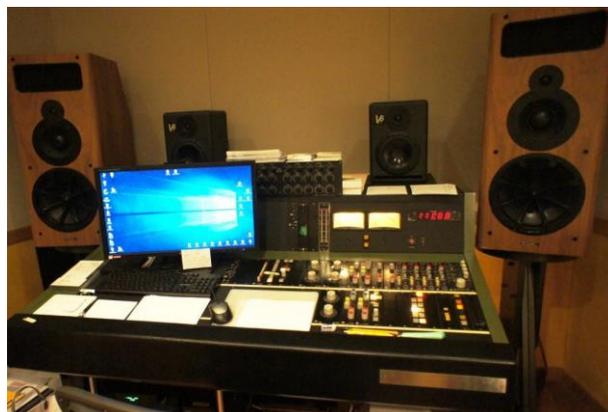
(写真最上) VMS80 本体 (写真左) VMS80 上部 (写真右) 検聴用アーム



(写真左) 操作盤を見る (写真右) 盤面検査用の顕微鏡



(写真左) ターンテーブルを横から見る (写真右) モーターの底を下から覗く



(写真中左) カuttingヘッド SX74  
(写真中右) ノイマン製コンソール本体  
(写真下左) Electronic Package SAL74

写真でご紹介してきましたように、カuttingグレースはVMS70とVMS80というNEUMANN(ノイマン)製の二世代のマシンが稼働し、二つあるカutting作業専用の部屋に設置されており、それぞれにオペレーター(エンジニア)がいます。

### カッティングエンジニア 手塚 和巳さん

カッティング一筋の手塚さんは1969年東洋化成に入社します。その頃の主力カッティングレースはVMS60で駆動アンプも真空管式のパワーが100ワット以下、さらにカッティングヘッドもSX45の時代というお話です。3~4年の運用ですぐにレースがVMS70になり、ヘッドもSX68に替わりますが、組み合わせのElectronic Package (SAL型番不明)が強すぎるのか、このSX68はひ弱ですぐにコイル断線を起こしていた印象とのこと。しかしその後SAL70ヘッドSX74の組み合わせになって故障も無くなり運用はとても安定していきました。このVMS70とSX74、SAL74は手塚さんが日々作業に用いているマシンです。

入社二年目のこと、当時のワーナー・パイオニアのエンジニア島さんがミックスした小柳ルミ子「わたしの城下町」のマスターテープが持ち込まれ聴いてみると、特にS音が強く、高域での電氣的リミッターが働いてしまう、と感じてEQなどを施すことを考えたそうですが、実際に



カッティングしてみるとそのままスナリと通り、その頃の上司と二人で首をひねるほど大変不思議な体験をされたのだそうです。

手塚さんは、「LP製作にはアナログテープマスターが向いていると考えておりクライアントにはお勧めしています。アナログテープならば30Hz以下の超低域の処理も自然で、また高音過多が起きにくく、その結果無理なカッティングを施す必要がないからです」と言います。CD勃興の一時期不遇な時代もすごされたとのことですが、アナログへの愛情をとても感じさせて頂くコメントでした。

カッティングエンジニア 西谷 俊介さん

自分の楽曲を録音したテープからアナログ盤を制作し、その時手塚さんに施してもらってカッティング作業に興味を持ったという、レコード店員だった西谷さんは2008年の入社で、東洋化成では技術継承が行われているという暖かいお話です。メッキ、スタンパー製造や営業も経験して、今はカッティングレース VMS80 で作業を進めています。自身小学生の頃に聴いていたBOØWYの再発でアナログ盤カッティングを担当し、彼らの作品化に参加できたことが嬉しかったという西谷さんは「ここ数年のアナログブームは欧米が先行している印象で、また世代のリバイバル感もあると思います。若者の所有感の斬新さメディアレスへの逆行など、アナログが新しいモノとして映っているのではないのでしょうか。LPレコードを聴いてもらうためには、基本的なことを一から説明していくことも必要だと思います」と言います。

またレコード会社から持ち込まれるマスターはデジタルが9割で、サウンドイメージも高域が伸びたキラキラしたものが多いそうで、収録時間の長いものも多くカッティングレベルを下げて対応するなど、対応苦慮することもあるようです。



(写真左から) カッティングエンジニア 西谷 俊介さん、  
カッティングエンジニア 手塚 和巳さん、藤得 成さん

写真を見てお気づきと思いますが、藤得さんは今後のカッティングエンジニアとして2014年入社での修業中の若者で、現在プレスやメッキ、仕上げも経験している期待の星です。学生時代のアルバイトでそのまま東洋化成に居座る、典型的で正しくもあり美しいスタイルですね。

西谷さんからデトロイトで開催された making vinyl レコードサミットのお話を伺いました。世界中からアナログレコード制作製造にかかわるマネージメント、3rd プロダクション、カットティング関係者 200 名以上が集まり、LP レコードプレス機、特に現在稼働しているカットティングレースが古くなりつつある中で刷新が行われず、音楽に興味を持つ若い人たちが参入してきているが、解がない現状の問題共有が話題だったそうです。

熱心なコンファレンスの進行に「あの時アナログ LP 事業を止めないで良かった」と東洋化成のみなさんは強く思われたことと想像致します。

2012 年の工場見学会で手塚さんがお話された「ラッカーへの正確なカットティング作業によって LP レコード盤にはマスターテープの音は全部入っています。ただ、再生時にレコード盤からすべてを取り出せていないだけなのです。」の一言で、レコード再生の道にのめり込み始めてしまいました。オーディオの諸先輩方もご指摘されている通り、プレーヤーでの再生時にトーンアームとカートリッジ針で溝をなぞる機構と、カットティングレースのラッカー盤へのカットティング動作機構と、その大きな違いはどうやっても埋められないようです。正直ため息が出てきますが、その再生が難しいレコード盤から自分で考えている音を取り出せたときは、無上の喜びを感じますね。わたしの城下町を聴きながら、昭和アナログレコード全盛期に、思いをはせています。